



～雲海富士～

聖岳より。雲海の発生は十分の一ほどの確率。  
まさに天候次第。

写真提供：三木 均 室長



# 地域連携室便り

愛媛県立中央病院 地域医療連携室

直通TEL 089-987-6270 (前方連携)

089-947-1165 (後方連携)

FAX 089-987-6271

No. 4 (2020年9月)

初秋を迎え、皆様におかれましてはますますご健勝のこととお喜び申し上げます。  
今回地域連携室便り No.4 9月 を刊行致しました。気軽に読んでいただけるようにと考えておりますが、  
皆様方からのご意見を頂ければ幸いです。聞きたいこと・知りたいこと等、ぜひお知らせください。  
この機会にぜひメール登録をよろしくお願い致します。

## 今回の内容

- ① 地域医療連携室現状報告
- ② 新センター長挨拶・・・形成外科・顎顔面外科 中川浩志／放射線科 井上武
- ③ 周産期センターを紹介します～こんなことをやっています～ 産婦人科 阿部恵美子
- ④ 第96回医療連携懇話会を終えて・・・呼吸器内科 森高智典
- ⑤ 漢方コラム：暮らしの中の漢方ーその1ー・・・漢方内科 山岡傳一郎
- ⑥ 地域医療連携室からのお知らせ～メールのご登録のお願い～

## ①地域医療連携室現状報告

今年は1月から新型コロナウイルス感染拡大により、各医療機関の皆様方もご苦労されている状況と  
思います。当院も、3月の医療連携懇話会から中止となり、県立中央病院として情報発信が出来ない  
ままでした。

地域医療連携室長に就任された三木先生の提案で、6月から【地域連携室便り】を発刊することになり  
ました。少々戸惑いましたが、各診療科の先生方にもご協力頂き、6月から【地域連携室便り】を毎月  
発刊することが出来ています。皆様いかがでしょうか・・・ぜひご感想をお聞かせ頂きたいと思  
います。

また8月より医療連携懇話会を再開することが出来ました。参加を希望して頂いたにも関わらず、感  
染予防策のためにご希望に添えなかった方々には大変申し訳なく思っております。しかし再び、三  
木室長の提案で【Web配信】の計画が持ち上がり、現在、まずは愛媛県公式YouTubeへの限定配  
信を計画中です。メール登録をして頂いた医療関係の方々を対象に先月の感染制御部 本間  
医師の講演を限定配信の予定です。ぜひこの機会にメール登録をお願いいたします。

皆様のご協力のもと、オンライン配信等試行錯誤を重ねていきますので、よろしくお願いいた  
します。

## ②ご挨拶

創傷ケアセンター長

形成外科・顎顔面外科 主任部長 中川 浩志



今年度より創傷ケアセンター長を拝命しました中川浩志と申します。よろしくお願いいたします。

私は高校までを大阪で過ごし、長崎大学に進学。1991年（平成3年）に卒業し、長崎大学形成外科学教室に入局いたしました。その後は長崎大学を中心に九州・沖縄、中国地方の各病院に勤務し2008年（平成20年）4月より当院形成外科に勤務をしております。

履歴書の職歴の欄は行が足りないくらいの転勤を繰り返し、今まで行ったこともない土地での勤務もざらで、若い頃はいわば旅行気分でした。当院も当初は今までのように2～3年で転勤だろうと考えておりましたが転勤の辞令はなく、気が付けば10年以上も経ってしまいました。今回、日浅前委員長の後任を任せられ気の引き締まる思いです。さらに発展するように一生懸命努力いたします。

創傷ケアセンターのご紹介です。

当院では2002年（平成14年）から実施された褥瘡対策未実施減算に伴い、褥瘡予防対策を中心に活動を行うために創傷対策委員会を設置したことに始まります。2009年（平成21年）より皮膚・排泄ケア認定看護師が誕生し、褥瘡ハイリスク患者ケア加算を行うようになり、多職種（医師、看護師、薬剤師、栄養士、リハビリ療法士、医療事務）で構成した褥瘡対策チームを発足しました。同年7月より褥瘡管理者として専従で皮膚・排泄ケア認定看護師が組織を横断的に活動し、病院内の褥瘡及び創傷やスキントラブル、ストーマケア（人工肛門・人工膀胱）、失禁ケアなどのラウンドを行っています。2012年（平成24年）に褥瘡患者管理加算が入院基本料の算定要件に統合され診療報酬の改定に伴い、創傷ケアセンターが設置されました。センター設置に伴い委員会の名称を創傷対策委員会より創傷ケア委員会と改名しその下部組織として褥瘡対策チームをおき各部署の専任医師・専任看護師を含め活動しています。

創傷ケアセンターの目的は、愛媛県立中央病院における創傷（動脈性疾患による創傷、糖尿病性創傷、静脈疾患による創傷、褥瘡、熱傷、凍傷、手術の創など）の予防対策と早期治療を達成することです。週1回褥瘡及びハイリスク患者の回診を行い創や栄養状態の評価、処置やケア方法の検討を行っています。また、褥瘡対策チームメンバーである専任医師や専任看護師に対して適切な褥瘡対策計画書の作成や実施・評価が行われるよう勉強会を開催し、また指導を行っています。

この活動の効果もあり、当院の褥瘡発生率は褥瘡学会より算出されている一般病院の褥瘡推定発生率1.2%と比較しても0.3%と、低く推移しております。また、2011年（平成23年）より毎年1回、地域の関連医療機関に対して褥瘡ケアの継続を図ることを目的に褥瘡セミナーを開催し、院内外に褥瘡発生の予防を中心に活動を行っています。

もとより浅学菲才の身ではありますが精一杯努力していきますので、今後ともよろしくお願いいたします。



## ②ご挨拶

PETセンター長  
放射線科 主任部長 井上 武

今年度よりPETセンター長、放射線部長を拝命しました井上 武  
(いのうえ たけし) と申します。

私は地元の松山東高校から愛媛大学医学部を1988年に卒業し、愛媛大学放射線医学教室に入局。大学院卒業後は松山市を中心に、永頼会松山市民病院、国立病院機構四国がんセンター放射線科に勤務しました。その間2005年には医局にお願いして、半年間浜松PET診断センターにてPET診療を修行させて貰いました。帰松後2006年の四国がんセンターの新築移転に伴うPET業務の立ち上げ、PET診療に携わり、2011年（平成23年）4月より当院放射線科で勤務、PET診療はかれこれ17年になります。今でも面白くて興味は尽きません。

当院のPETセンターは愛媛県で最初のPET施設で2006年（平成18年）3月に、県民の皆様幅広くご利用いただけるようにと、地域連携業務を充実、PETがんドックも十分な検査枠を設定し、『愛媛PET-CT センター』として設立されました。現在は『PETセンター』と呼称を変更しています（CT検査を受ける患者さんが間違っ来棟することが多かったため）。

PETがんドックは2019年度末までに延べ件数5941件で156例（2.6%）のがんを発見しています。発見された場合は、ほとんどの受診者に当日に『がんの可能性』をお伝えします。もちろん直後には動揺もされますが、早く教えてくれて良かったと感謝されています。松山圏域の開業医の先生などコアリピーターも多く毎年楽しみ(?)にされているご様子です。

設立当初、愛媛県のPET施設は当院と四国がんセンターの2施設のみでしたが、現在では県内7施設に増加しています。当センターの特徴はサイクロトロンを有しており、がん診療に欠かせない<sup>18</sup>F-FDGを自前で製造していることと、心筋血流の詳細な評価のための<sup>13</sup>N-アンモニアPET検査を愛媛県で唯一行える施設であることと自負しています。

2018年末には念願であったPET-CT装置（2台）の更新を終え、2020年度中にはサイクロトロンのオーバーホールも控えています。

PET検査は<sup>18</sup>F-FDGによる悪性腫瘍の描出で一気に広まったわけですが、今後世界でも広く使われている新たなPETプローブ（診断薬）が続々と日本でも使用可能になれば、Theranostics（画像診断から治療の融合）や認知症早期診断など大きな力となり、私の夢は尽きません。

PETセンターが今後とも皆様の健康にお役に立つように尽力いたしますので、よろしく願いいたします。

## ③周産期センターを紹介します ～こんなことをやっています～



周産期センター副センター長  
産婦人科 主任部長 阿部 恵美子

平素、地域の先生方にはたくさんのご紹介を賜り、この場をお借りし心より御礼申し上げます。当院は、愛媛県唯一の総合周産期母子医療センターを併設し、県内の周産期医療の「最後の砦」としての役割を果たしています。また、産科医療については、産科独自の搬送体系を早くから構築し、運用を行っています。今回、周産期医療に携わる医療機関以外の各医療機関の皆様にとってはなかなかみえないであろう私たちの活動をご紹介したいと思います。

現在の総合周産期母子医療センターの前身である周産期医療センターは、平成2年に開設されました。産科部門と新生児科部門の2本立てで運営され、平成16年に総合周産期母子医療センターに指定されています。産科部門では①切迫早産や妊娠高血圧症（かつての妊娠中毒症）、前置胎盤などの産科疾患、②心臓や脳外科、腎臓などの合併症妊娠、③胎児奇形などの胎児疾患、④母体救命救急疾患などを24時間体制で受け入れています。全国には総合周産期母子医療センターであっても、いわゆる「こども病院」のように合併症妊娠や母体救命救急疾患などには対応困難な病院、反対に救命救急センターを併設し母体救急疾患には強いものの、胎児治療などは困難な病院もあります。また東京都は母体救命対応総合周産期母子医療センター（いわゆるスーパー総合周産期センター）を指定しています。当院は高度救命救急センターを併設しているため、スーパー総合周産期センターの機能も兼ね備え、オールラウンドに対応できるセンターとなっています。

近年、特に目覚ましい進化をとげているのが、胎児診断・胎児治療の分野です。超音波機器の進化とともに、早期より胎児診断が可能となっています。大奇形の多くが妊娠22週未満に診断することが可能となっていますが、その一方で妊娠中断に結び付く診断となってしまうこともあり、妊婦さんへの対応に苦慮することもあります。胎児診断の目的は、妊婦さんにとっては妊娠中より胎児の疾患を理解し受け入れ、出生後のスムーズな治療に移行できるように、我々医療者にとっては、出生後の児の治療をふまえた妊娠管理、分娩管理を行うことにより、胎児がベストな状態で出生できるようにすることです。しかし、今なお治療方法が確立されておらず、出生後の長期生存が厳しい疾患に遭遇した場合は、限界を感じざるを得ません。

胎児に対する治療はそのほとんどが保険収載されていませんでしたが、2012年より施設基準を満たした施設に対して胎児鏡下胎盤血管吻合レーザー凝固術と胸腔・羊水腔シャント術が保険収載されています（胎児鏡下胎盤血管吻合レーザー凝固術が可能な病院は国内で9か所のみ、中四国には1か所のみ）。当院では胸腔・羊水腔シャント術に対する施設基準を満たしており、繰り返す胎児胸水症例に対して胸腔・羊水腔シャント術を行い、良好な結果を得ています（写真1）。また、高度な胎児貧血症例（血液型不適合による免疫性胎児水腫やパルボウイルスB19感染など）に対し、臍帯輸血を行い胎児期に貧血治療を行っています。いずれも無治療であれば子宮内胎児死亡や、出生後循環や呼吸管理に難渋する症例ですが、胎内で治療することにより後遺症なき生存を目指せるようになりました（写真2、3）。

以上、簡単ではございますが、当センターの活動について紹介させていただきました。産婦人科の先生方以外にも、私たちの活動にご理解いただければ幸いです。これからも愛媛県の周産期医療の最後の砦として奮闘していく所存です。



写真1



写真2

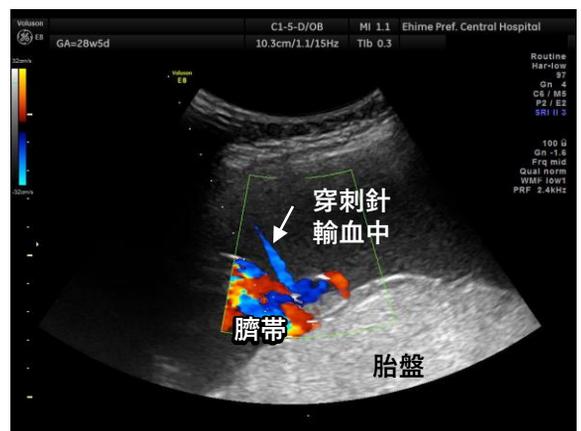


写真3



## ④第96回医療連携懇話会を終えて

感染制御部部长 がん治療センター副センター長  
呼吸器内科 部長  
森高 智典

---

2020年8月5日に『COVID-19 ～今までとこれから～』をテーマに開催いたしました。当院では2020年1月から个人防护用具の着脱訓練を開始し準備をしておりました所、3月中旬に最初の新型コロナ感染症患者さんを受け入れ収束の見えない中で診療を継続していますが、その対応には全職員がone-teamとして当たっています。

行政・保健所との連絡網、面会禁止への対応、PPEの確保、ホームページの更新、施設管理・薬剤部・放射線部や検査部との打ち合わせ、食事や清掃の工夫、一般診療の制限など、全ての職員の協力のもとCOVID-19に対応しています。

今回は事務職、看護師、医師の立場から診療経験を発表させていただきました。山口 雅彦専門員（医事グループ）からCOVID-19の感染症法上の位置付けや当院に寄せられた問い合わせ内容（8割以上がPCR検査についてでした）について報告いたしました。

稲田 富美香看護長（感染症病棟）から感染症病棟の概要、受け入れ準備（物品、マニュアル作成、PPE脱着訓練、ゾーニングなど）に続き最初の患者さんの受け入れ、その後のクラスター発生時の対応、職員への風評などについて報告いたしました。

本間 義人医師（感染制御部）からSARS-CoV-2、検査や臨床症状と感染力、治療などについて説明し最終的に感染の連鎖を止めるにはマスク、手洗い、体調管理が基本であるが今後も散发例の発生は起こりうるとして、ワクチンや有効な治療薬の開発までしばらくウイズコロナの生活様式が続くことを報告しました。

3名の発表のあと検査や県外からの来県者への対応に関する質問があり、また懇話会の終了後も個別にご相談いただくなど関心の高さを感じました。



ウサギギク（水晶岳） 写真提供：三木 均 室長

## ⑤「暮らしの中の東洋医学 – その1 –」

漢方内科 主任部長 山岡 傳一郎

### 夏バテは秋にやってくる

猛暑はいつまで続くのかと思っておりましたが、お盆過ぎると少し秋を感じるようになりました。私の漢方外来で口酸っぱく「夏は瓜を食べるように」と指導して参りました。中国の古典にも「瓜」を食べることを推奨しています。「西瓜」「胡瓜」「苦瓜(ごうや)」「南瓜」「冬瓜」、そして「糸瓜」も食べることができるよう。適当な水分と利尿作用があることをかつての人々は知っていたのです。漢方薬の運用は、下記のようにしておりますので、宜しければご参照下さい。

のぼせ、口渇、筋肉のひきつりなどあれば、白虎加人参湯。瓜でよくなる、胃腸障害、頭痛、ふらつきには、五苓散。疲れ、気力・体力低下、気分の落ち込みがあれば、補中益気湯。さらに下痢は加われば清暑益気湯があります。最後の処方が一番活躍するのは、これからやってくる秋になります。コロナ疲れを癒して自然免疫を高めたいものです。

## ⑥地域医療連携室からのお知らせ

今後各種ご案内やお知らせ(医療連携懇話会案内・地域連携室だよりなど)はメール配信を推奨させていただきたいと考えております。他、県立中央病院ホームページのタイムリーな更新情報も順次配信予定です。メールでの配信を希望される医療機関様につきましては、お手数ですが、下記メールアドレスへ医療機関名を記載し、送信をお願いいたします。



**E-Mail : [c-renkei@eph.pref.ehime.jp](mailto:c-renkei@eph.pref.ehime.jp)**

<件名> メール登録(医療機関名)

<本文> ・医療機関住所、電話番号

・ご意見やご希望などあればご連絡下さい。

**特典!**

医療連携懇話会の動画配信がご覧いただけるようになります!



お問い合わせは 

愛媛県立中央病院 地域医療連携室 <担当>塩出・渡部

TEL : 089-987-6270 FAX : 089-987-6271 E-mail : [c-renkei@eph.pref.ehime.jp](mailto:c-renkei@eph.pref.ehime.jp)



チシマギキョウ(水晶岳) 写真提供: 三木 均 室長

次回9月号(No.5)は  
10月中旬頃刊行の予定です

お楽しみに!

